The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ポー短編小説の一側面(2)
Author(s)	松阪, 仁伺
Citation	Osaka Literary Review. 1977, 16, p. 73-82
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25639
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ポー短編小説の一側面 (2)

松 阪 仁 伺

Ⅲ 物語の視点について

OLR 14号で論じた "William Wilson" にひき続き本号では "The Tell-Tale Heart" と "The Imp of the Perverse" を論じる。その前にまずここで予備的な考察として，これらの物語を解釈する鍵となる叙述の視点について考える。"William Wilson" を含めこれらの4つの物語は物語の構造として1つの共通性を持っている。それは主人公は即ち語り手であり，さまざまな出来事はすべてこの語り手の視点で述べられているということである。いずれの物語においても何らかの罪を犯した主人公が過去を回想しながら語っている。それゆえにこれらの物語のさまざまな異常な現象を考える前にまずこれらの語り手自身をよく吟味する必要がある。というのもわれわれはいろいろな事件を語り手というメガネを通して見るわけであるから当然そのメガネ自体が問題となるのである。つまりこれらの主人公というメガネは無色透明で何の曇りも歪みもないメガネであるのかという問題があるのである。とてもそうとは考えられない。このことをそれぞれの主人公について少し考えてみる。まず Wilson については14号でこの話がこみ入っているのは語り手が自己疎外された人間であり，物語は1人の人間の中の1面からなされるためであるということはすでに述べた。"The Tell-Tale Heart" の主人公は自分が狂人であると思われていることを強く意識してわれわれに何度も例をあげてそれを否定する。しかしこの彼の主張はそれが繰り返される程，ますますわれわれの確信が高まるという皮肉な効果を持っている。それゆえに彼の物語は全面的には信用できな

いかもしれないのである。例へば彼は老人の眼に恐怖心を持っているがその理由については語らない。彼は意識的にそれを隠しているのかも知れない，あるいは狂っているために自分でさえもその理由を知ることができないのかもしれない。いずれにしてもこの主人公の話の奥に真の理由が存在するかもしれないということはありうることである。さてこの主人公と "The Imp of the Perverse" の主人公に共通して，異常な点は彼らが Wilson と同様自己疎外された人間であるということである。彼らは自分自身をわれわれの前に無情な殺人者の姿で提示するし，彼ら自身もそう信じている。しかし実際はそうではないのである。このことについては後に論ずる。"The Black Cat" の世界はもっとも怪奇な，超自然的な世界である。そこではわれわれの日常の理性的な秩序が破壊され，無気味な黒猫が主人公を狂気と破滅に追いこむ。しかしこれは世界自体の秩序の崩壊ではなく，崩壊していくのは主人公自身の理性的秩序であると考えられるのである。この点については次号においてくわしく論じる予定である。

いずれにしてもこれらの主人公たちの物語は主人公自身が異常であるために全面的に信用することはできない。といってもこれらの主人公がうそを言っているというわけではない。これらの物語はすべて主人公の主観的事実なのである。それゆえに主人公が狂っているとしたら，客観的な事実がそれと異なっているかも知れないということは大いにありうることである。だから主人公たちの記述をうのみにせずにその奥に意味を探ったり，あるいは主人公という歪んだメガネに修正を加えることにより，これらの作品を解釈することは許されるべきことであり，また妥当な方法であると思われる。

Ⅳ "The Tell-Tale Heart" と "The Imp of the Perverse"

この "The Tell-Tale Heart" という物語では日常性がぎりぎりのところまで削ぎ落されている。登場人物は主人公と1人の老人であるが彼らの名前はおろか，年令，職業，日常の行動など全く明らかにされない。さら

に言えば彼らは同じ家に住んでいるのではあるが，彼らの関係さえも不明である。ただただわれわれに迫ってくるのは語り手と老人との不可解で異常な関係であり，殺害の経過とその発覚だけである。まるで悪夢のような物語である。Daniel Hoffman[1] や Marie Bonaparte[2] は2人の関係を Poe 自身と厳格な養父でありたびたび Poe と諍をくりかえした John Allan ととらえている。筆者自身も Poe の伝記を読んでこの物語を読む時には，Poe の幼い頃の直接の経験が土台になっているという印象はぬぐいがたいのであるが，ともあれ2人の関係は父と子，あるいは伯父と甥というような非常に親しい関係であることは否定できない。

この物語でわれわれをもっとも当惑させるのは殺人の動機である。主人公は老人を愛していたと言い，老人のお金に野心を持ったこともなかったと言う。ただ，奇妙なことではあるが主人公の語るところによれば彼を不断に苦しめ最後には老人を殺害することを決意させたのは老人の眼であった。実際彼が憎んでいたのは老人自身というよりむしろその眼であったのだ。その眼をこの世から抹殺するために老人を殺してしまう。この点はいかにも不可解である。普通殺人が行なわれる場合には，それなりの理由が考えられるものである。憎しみのあまり，あるいは金銭欲などの利己的動機でということであればその行為はわれわれが是認するものでないにしてもある程度われわれを納得させる。あるいは子が親を殺すという異常な事件においてもその事情を覗い知ることができれば何ほどかでもわれわれを納得させる動機が存在するのが普通である。ところがこの主人公の場合にはそのようなものは全くない。単なる眼が殺人の契機になるなどとはいささかもわれわれを納得させる力のない動機であると言わざるをえない。それゆえにわれわれはこの物語を常人の理解を超えた狂人の物語であるときめつけたくもなるのである。が，果してそうであろうか。この異常性は人間の心理などを無視した単なる作り事なのであろうか。そうとは思えないのである。この物語が異常な力をもってわれわれに迫り，また再読に耐えるという事実，あるいは Baudelaire の Poe の小説は心理小説として読

まれるべきであるという主旨の指摘などを考えに入れればこの物語の奥に何か心理的な意味を発見できそうに思われる。

さてこの眼の意味を考察しようとするのであるが，まずこの物語の中でそれがどのように描写されているかをみてみる。問題となる，老人の片方の眼は Evil Eye と言われている。Evil Eye というのは見るだけで人に害を与えたり，殺したりする力を持った眼のことである。次の引用を見ればそれがどのように主人公をゾッとさせたかがわかる。

> One of his eyes resembled that of a vulture—a pale blue eye, with a film over it.[3]
>
> I saw it with perfect distinctness—all a dull blue, with a hideous veil over it that chilled the very marrow in my bones.[4]

ここでは老人の眼は vulture のそれに譬えられている。Poe の "Sonnet—To Science" において，vulture は science に譬えられそれは醜い事実を露呈することにより，詩人が宇宙に対して持っていた夢想や神話を破壊してしまうものであった。そこで，老人の眼＝science という等式が成り立ち，老人の眼は何かこの詩における科学の役割を持っているといってもよさそうである。次の引用は主人公が老人を殺害しその死体を部屋の中に隠した後で言うことばある。

> "I then replaced the boards so cleverly, so cunningly, that no human eye—not even *his*—could detect anything wrong. There was nothing to wash out—no stain of any kind—no bloodspot whatever."[5]

死体をうまく隠してしまって主人公はいささか得意気であるが，not even *his* という部分に注目したい。*his* は勿論 *his eye* のことであるからこの部分を日本語に訳せば，「彼の眼でさえも」ということになる。彼というのは勿論，老人のことである。老人の眼は常人以上に鋭い眼をしていて，主人公は常に何か不都合なことをその眼に見つけられないかとビクビクし

ていたのではないかというふうに感じられないであろうか。主人公は老人の眼に異常なほど恐怖心を持っている。眼が恐しいということはとりもなおさずその眼によって見られることが恐しいということであろう。それではなぜ見られるということが恐怖につながるかという問題であるが，上にあげた引用にその解決の糸口があるように思われるが，それを手がかりにしてもっと一般的に考えれば次のように考えられるのではなかろうか。

まず "The Murders in the Rue Morgue" の中の1つの興味深い挿話を紹介する。

ある晩に語り手は名探偵の Dupin と一緒にたがいに無言で散歩しているが，突然に Dupin は語り手が考えていることをいいあてる。驚いた彼はその理由をただす。Dupin によればそれは何げない動作を観察することにより彼の観念の連鎖をさぐりあてえたということであった。これは極端な例であろうが，われわれでもある人の性情をよく知っていれば，その行動を観察することにより考えていることを知ることができるということはありうることである。逆に言えば他人に見られている時には，ある程度自分の内面をさらけ出すことにもなる。

つまりこの主人公が老人の眼に対して持っていた恐怖というのは自分の心の中までその鋭い眼で見透されるという恐怖ではないであろうか。彼は老人が禁ずること，是認しないことを企らんでいたかもしれない，またうそを言ったかもしれない。その時にその眼はそれを見透してしまう力を持っていた，あるいは少なくとも彼にはそう感じられたためにその眼は憎悪の対象になっていたのではなかろうか。その憎悪の中にはその秘密を見られた上での叱責，恥辱なども含まれているであろう。あるいは主人公は何か老人のものを盗んだり，禁じられたことをしたりしている時に常にその眼に見つめられているように感じたのではあるまいか。あるいはほんの少しでもその証拠が残っていれば，ただちに老人の眼はそれを看破しえたのではなかろうか。それゆえにこそ老人の眼が恐ろしかったのではなかろうか。

さてこの主人公が子供であるかどうかは少なくともこの物語からは知ることはできないが，彼の感じている恐怖は本質的に子供のものといえる。大人がわれわれの心の中を読んだり，あるいは秘密を見出す特別の力を持っているように感じられるのはわれわれの幼時の体験である。この主人公には大人が見ていない行為は大人には知るすべがなく，自分が考えていることを自分の心の中だけにしまっておけば大人はただ推測することができるだけであるということがわからないのである。彼は常に老人の眼によって内心を見透されているように感じているのである。

Daniel Hoffman は主人公と老人の関係を Poe 自身と養父 John Allan と考える。それゆえに Hoffman は老人の眼を父親の子供を監視するすべてを見る眼と考える。この監視は勿論子供の良心の源泉であり，父親の厳格な正邪の観念を子供に植えつけるものである。それゆえにこの眼は子供の恐怖の対象となるのである。つまり子供がほんの少しでも道を踏みはずせば，その眼はすぐにそれを見つけるからである。

2人の関係を Poe と John Allan ととらえればこの Hoffman の論は妥当なものと思われる。そうであれば，その父親の眼は子供の良心の象徴と考えることもできるかもしれない。“William Wilson” においては，われわれは第2の Wilson（良心）が主人公にしつこくつきまとい悩ますのを見た。この眼を良心の象徴と考えればそれはこの物語の主人公にとって第2の Wilson のようにわずらわしいものであったとも考えられる。

さてこの物語の中でもう1つ不可解なものは老人の心臓の音である。主人公は自分自身を神経過敏であると言うのではあるが，彼は老人を殺そうとする時に聞こえるはずのない綿にくるまれた時計のような老人の心臓の鼓動の音を聞く。また最後の場面では殺したはずの，だから絶対聞こえるはずのない老人の心臓の音を聞く。これらは共に幻覚であろう，あるいは自分の心臓の音ととり違えたのかもしれない。この2つの奇妙な現象は私にはわからないが，少なくとも主人公が非常な神経的な興奮状態にあることだけは確かである。ここではそのことに関係して，主人公が自分自らそ

の罪を告白するという奇妙な行為について考えてみたい。

"The Imp of the Perverse" においても同様な事件がおこる。この主人公も綿密な計画のもと完全犯罪をやり遂げ，遺産を相続する。発覚するおそれは全くなかったと彼は言う。ところがこともあろうに，ある日何かに取り付かれたかのように精神的混乱に陥いった彼は自分自らの手で自分自身を警察の手に委ねてしまう。彼は自分が罪を告白した瞬間のことを全く覚えていない。その様子を彼は他人から聞く有様である。

> They say that I spoke with a distinct enunciation, but with marked emphasis and passionate hurry, as if in dread of interruption before concluding the brief but pregnant sentences that consigned me to the hangman.[6)]

この瞬間に彼は全く別の人間になってしまったかのような印象をうける。この2つの物語の主人公の行動のパターンは多少の違いはあるにしても同じものと考えられる。この到底常識では想像もできない，そのつもりもないのに自分自身の罪を告白するという不可解な現象をどのように解釈すべきであろうか。この2つの物語だけをいくら子細に読んでもこの謎を解くことはできない。しかし他の物語に眼を転じれば，見たところ少し違いはあるけれども結局同じ現象が起っているのがわかる。その物語とはつまり，OLR 14号で論じた "William Wilson" である。その Oxford での賭博の場面で主人公の Wilson はイカサマである貴族から莫大な金額の金をまきあげる。その時第2の Wilson が突然現われそのイカサマをあばいてしまう。第2の Wilson はつまり主人公の Wilson の良心なのであるから，彼自身が罪を告白したと考えることもできる。そうすれば今論じている2つの物語の問題にしている2つの場面と同じものと考えられる。そうだとするとこの2つの物語の主人公と William Wilson は結局同じタイプの，同じ精神的な構造を持った人物ではないかという疑いが生じる。実際によくよく検討すればそうであることがわかる。

そこでもう1度 William Wilson の特徴を挙げればその攻撃性であり，利己本位の利益だけを追求する執拗さである。彼にとっては自分がすべてであり他人を踏みつけたり，自分のために利用することをあたり前のことと考える。彼の眼から見ればイカサマで大金をまきあげることも，他人の妻を誘惑することも悪いこととはうつらない。法律や道徳などは嘲笑っているように見える。しかし実際にはそうではなくて，彼の中には奇妙な形でではあるが良心が存在することは OLR 14号で論じたとうりである。この Oxford での場面をもう少し子細に検討すると，Wilson が巧に良心の干渉を避けようとしているのがわかる。彼が自己の不当な行為を正当化しようとする理屈は次のようなものである。まず彼は賭博の相手の成りあがりの貴族に対して自己の優越を信じている。また，その貴族が持つ富は莫大なものであり，ごく簡単に手に入れられたものであるために，たとえイカサマで少しぐらい金をまきあげてもそれはそう責められるべき行為ではないと考えているのである。しかし実際には彼の予期とは異なり，Wilson は相手の貴族を完全に破滅においやるのである。それだからこそ，その瞬間に彼の良心（第2の Wilson）が出現してイカサマをあばいてしまうのである。

さて "The Tell-Tale Heart" の主人公はごく些細なことが原因で殺人を犯すのに道徳的な意味における何らのためらいを感じていない。殺人を犯した後でさえも死体をうまく処理して世間の眼をごまかせばそれでこと足りると考え，何ら自己の罪を悔いる様子は見られない。"The Imp of the Perverse" の主人公も財産のために人を殺すことを屁とも思っていないし，殺人の後に後悔する様子もない。彼らは全くの冷血漢であって良心のかけらも持ちあわせていないように見える。しかし果してそうであろうか。William Wilson の場合と同様答えは否である。まず第1に自己の意志に反した行為であるとはいえ，彼らが自らの罪を告白したということは，彼らの中に良心（社会的自我）が存在する何よりの証拠ではなかろうか。そこでやはり彼らについても本能的で反社会的な自我と良心の関係が問題

となるがこれについては OLR 14号で William Wilson について論じた部分が彼らにもあてはまるのでここでは詳しく論じない。

ここでは14号で少し紹介した self-alienation という概念でこれらの主人公たちを特徴づけてみたい。Self-alienation とは本当の自己 (one's actual self) からの疎外を意味する。自己疎外された人というのは自分が本当に感じること，好むこと，信じることつまり本当の自分に気づかないあるいは忘れてしまった人のことである。つまり彼は自分自身を見失なってしまっているのである。Karen Horney は self-alienation は自己欺瞞や抑圧のせいであるとする。例えばそれは人が自分自身に対して idealized image を持つ時におこるという。Idealized image というのは人が自分自身に対して持つ image であるが，image という言葉自体が暗示するようにそれは本当の自分から遙にへだたったものであり到底なり得ない理想の姿である。勿論その人本人はそのようなことには気づいていない。そして人が自分自身を idealized image 通りの人間であると信じる時に自己疎外がおこるのである。[7]

この現象をこれらの2人の主人公にあてはめてみれば William Wilson の場合と同様ぴったりあてはまることがわかる。つまり彼らがわれわれ読者に描き出してみせるところの冷血漢というのは idealized image であろうと思われるのである。勿論彼らは自分自身をそうであると信じている。あるいはこの冷血漢というのは彼らの1面にすぎないのであるが，彼らは自分自身をこの image にあわせてしまい，自己の中の良心の存在を否定してしまっている。あるいは彼らはもともと良心など持ちあわせていないと自分自身を信じている。しかしながら彼らの本当の姿というのは彼らが自分自身をそうであると信じこんでいる利己的で残酷な自我と，良心をあわせもった姿なのである。ところが彼らは自分自身をただ利己的な冷血漢と信じている。それゆえに彼らは冷血漢という idealized image を持つことにより本当の自己を見失なってしまっているのである。

さてこれらの主人公たちの我知らず罪を告白してしまう場面はこのよう

に彼らが自分自身の中にその存在を否定してしまっていたが実際には心の中にしっかりと根をはっていた良心が，主人公の心理的なバランスの乱れに乗じて突然に現われたと解釈できるのではなかろうか。

さて周知のように，"The Imp of the Perverse" においては，主人公は人間の中に理性ではとても理解することのできない "perverseness" が存在するという。そしてこの主人公の説明によれば彼の奇妙な行為はこの "perverseness" によるのである。そこで当然に今まで論じてきたことと "perverseness" との関係が問題となるわけであるが，Poe の言う "perverseness" そのものを検討するのも簡単なことではないのでこの問題は次号において論じる予定である。

注

この小論文は OLR 14号の続きである。14号においては "William Wilson" を論じた。拙い論文ながら14号も読んでいただければ幸いである。というのもそうしないと，本号もよく理解してもらえないと思うからである。この論文の，あるいは誤っているかも知れないが，最も根本的な点は本号で論じた２つの物語を "William Wilson" と関係づけたことである。その理由というのは，物語の形式上の一致，主人公がよく似ていること，また自己の意志に反して罪を告白するという奇妙な現象がいずれの物語にも見られるということなどである。

1) Daniel Hoffman, *Poe Poe Poe Poe Poe Poe Poe* (New York: Anchor Press, 1973), pp. 221-7.
2) Marie Bonaparte, *The Life and Works of Edgar Allan Poe* (London: The Hogarth Press, 1971), pp. 491-504.
3) Edgar Allan Poe, *The Complete Tales and Poems of Edgar Allan Poe* (New York: The Modern Library, 1938), p. 303.
4) *Ibid.*, pp. 304-5.
5) *Ibid.*, p. 305.
6) *Ibid.*, p. 284.
7) Richard Schacht, *Alienation* (New York: Doubleday & Company, Inc., 1970), pp. 148-53.
   Karen Horney, *Our Inner Conflicts* (New York: W. W. Norton & Company, Inc., 1945), pp. 96-114.